

唯識思想をめぐる Prajñākaramati の世俗の立場

——『入菩提行論細疏』第九章を中心に——

積 見 弘

1. 本稿の目的

Prajñākaramati は、Vikramaśīla¹⁾ 寺院を中心にして活躍し、当時の中観学派を代表する最も高名な学匠として伝えられており²⁾、彼の生存年代は 10 世紀から 11 世紀頃であると想定されている³⁾。『入菩提行論細疏』*Bodhicaryāvata-
rāpañjikā* (=BCAP) は、彼の著作であり、それは Śāntideva の十章からなる『入菩提行論』*Bodhicaryāvata-
tāra* という伝承本に対する註釈書である。

すでに指摘されているように、十章からなる梵文の伝承本よりも、敦煌出土のチベット訳の九章本の方が Śāntideva の原著に近いと考えられている⁴⁾。不明な点も多いが、歴史上の流布に関して言えば、10 世紀以降のインド仏教、および Atīśa (982-1054) に始まるチベットのカダム派の伝承の中では、十章本が一種の定本となり、11 世紀後半には、Prajñākaramati による『細疏』が重要視される傾向があった⁵⁾。

この『細疏』の中で、最も重要な位置を占めているのは、第九章「知恵の完成」に対する註釈である⁶⁾。この第九章は、中観学派の二真理説を中心とするものとも言えるが、二真理説に対する彼の理解は、一体どのような特徴をもっているのかは、必ずしも明瞭なものではない。本稿ではその中に述べられている「唯識学派との対論」をめぐる、世俗の次元において、彼の唯識思想、特に自己認識に対する思想的な立場を明らかにしてみたい⁷⁾。

結論を先に述べておこう。世俗の次元における彼の唯識思想や自己認識に対する立場は、世俗という語の意味合いによって異なっている。すなわち、世間の人々が理解している自己認識という言葉の意味に依拠して、存在界の行為一般の事実に関して言えば、自分自身に対して作用することが経験されないか

ら、Prajñākaramati は「自己認識説」を否定している。一方、教説 (āgama) という意味合いでの世俗の次元においては、彼は唯識説を容認している。また、世俗の立場に立って認識がいかにして生じるのかを説明するときに、彼は「心と対象とが異なるものでありなおかつ同時に生じるものである」と主張しながら、「心が対象の形象をもつ」という説を採用していない。さらに、修道論を述べる際にも、唯識説を中観の修道の一段階として取り込もうとする動きを彼も示していない。

2. 自己認識批判：特に行為要素の視点から

2.1 対論のまとめ

『細疏』において、唯識学派との対論は二つの部分に分けられる。前半では認識論、特に自己認識の可能性についての視点から、後半では輪廻と解脱、つまり存在論の視点から、対論を進める。その中、自己認識をめぐる対論はさらにまた、行為要素という側面から、想起という側面から、他心知という側面から展開していく。それは要約すれば次のようになる。

(一) 中観論者から、「幻(対象)が心に他ならないなら、一体何が何によって見られるのか」と論難されたので、唯識論者は「自己認識説」を持ち出す。これに対して、中観論者は、「自分自身に対する作用の矛盾 (svātmani kriyāvirodha) が起こるから、自己認識はありえない。ちょうどどんなに鋭い刀刃も自分自身を切りはしないように」と反論する(=本稿 2.3.1)。

(二) この「自分に対する作用の矛盾」を取り除くために、唯識論者は二つの喩例を挙げる。一つ目は、「灯は闇に覆われた壺などを照らしながら、自己をも照らしている」という喩例であり、二つ目は「青くなることに関して水晶と青いものが相違する」という喩例である。この二つの喩例がともに否定されたあと(=本稿 2.2)、唯識論者は、Śāntarākṣita の二つの詩節を用いて、「灯が、自分自身を照明するのではなくて、照明を本質とするのである」云々と再反論しようとしている(=本稿 2.2.1)。この再反論もまた、中観論者によって批判される(=本稿 2.2.2)。さらに、中観論者は、「灯が照明を本質とするものである」という喩例を容認した上で、「認識が自ら照明する」ということの可能性を否定する。

(三) そこで、唯識論者は「想起」という側面から自己認識の存在性を証明

しようとしているが、それが論破される。次に、「他心知があるから、自己認識もあるはずだ」という主張もまた否定される。そのあと、「もし自己認識がなければ、対象の認識もありえない。そうすると、直接経験されたものなどの日常的事物のすべても、世間においてありえなくなる」ということによって、唯識論者は再反論しようとしている。この点に対して、中観論者は、「世間の人々が是認している物事は中観の定説においては否定されないから、認識対象がないという誤謬はない」云々と釈明する(=本稿3の〈C〉)。そしてそれで、*Bodhicittavivarana* の詩節の引用とともに、自己認識批判が終了する。

2.2 資料1と分析

本稿の問題点、つまり唯識思想に対する Prajñākaramati の世俗の立場はどうかということについては、上述した(一)と(二)との中に、それぞれ一点の関連資料が見出される。両者はともに、勝義の次元で自己認識の可能性を論じており、しかも世俗の次元で議論を展開するものである。

まず一つ目の資料は、上述の(二)の後半における唯識論者の再反論と中観論者の答論である。そこに述べたように、自己認識の「自分に対する作用の矛盾」を取り除くために、唯識論者は二つの喩例を用いる。一つは、「灯が闇に覆われた壺などを照らしながら、自分自身をも照らす。それと同様に、認識も対象を認識しながら、自己を認識する」という喩例である。この喩例を、中観論者は「壺と違って灯は初めから闇に覆われていたものではない。だから灯は壺と自身との双方を照らすことはない」と論破する。そこで、唯識論者は別の喩例を持ち出す。「水晶が青くなるためには別のものを必要とする。しかし、青いものが青くなるために別のものを必要としない。従って灯は壺と違って、別の灯の照明を必要とせず自分自身を照らす。それと同様に、認識は自分自身を照明する」。この喩例もまた、縁起説に基づいて「青いものもまた、青くなるためには、水晶と同様に別の原因を必要とする」と否定される⁸⁾。こうした中観論者の論破に対して、唯識論者は次のように反論する。(*以下の反論と答論は、詩節 20cd に対する註釈の後半に該当する。また、資料内の太字は筆者によるもの。)

